

美術の窓(173)

慶応3年の万博に出品された画譜・絵手本

大和文華館館長 浅野秀剛

4月13日に始まった大阪万博もこの「美のたより」が出る頃は会期の半分にさしかろうというタイミングである。1970年の万博開催時、19歳の私は立命館大学の一回生であった。当時、万博に行くところから軽蔑されるような雰囲気があったので、どうしても行きたいという強い思いのなかった私は、近くに住んでいたにもかかわらず、遂に行かずじまい。だから、2018年にあべのハルカス美術館で「太陽の塔」展を開催した時はかなり思いが強い思いをしたことを思い出す。

日本が初めて万博に参加したのは、慶応3年(1867)年である。その時は、江戸幕府の他、薩摩藩と佐賀藩が出版した『徳川昭武滞欧記録』(3冊、1932年刊)を見ると、江戸幕府は、狩野派の掛軸や浮世絵などの他、『江戸名所図会』『北斎漫画』などの図会・絵本類や工芸品を中心に、莫大な数の産物を出品している。私は以前、『浮世絵細見』(2017年)で浮世絵師による肉筆画の「浮世絵画帖」のことを述べたことがあるが、今回は、「画式の書」として記録されている画譜・絵手本12種と、徳川昭武がパリ滞在中に日本から取り寄せた「雑品」のなかの錦絵について述べてみたい。

12種の書とは「北斎漫画 拾四冊(14冊、以下同様に表示) 代金壹両壹分永八拾三文三分(1.3333両、以下同様に表示)」「北斎画譜 3冊 0.2917両」「浮世画譜 3冊 0.275両」「万職図考 5冊 0.5両」「北斎画本 1冊 0.125両」「武蔵鑑 1冊 0.125両」「万象写真図絵 3冊 0.2833両」「花鳥山水 5冊 0.3両」「為斎画式 2冊 0.1417両」「后素画譜 1冊 0.075両」「絵本錦の囊 1冊 0.0917両」「絵本龍の部 1冊 0.0917両」である。

そのうち、北斎の作品は「北斎漫画」「北斎画譜」「北斎画本」「(絵本)武蔵鑑」の4種、北斎門の二代葛飾

戴斗の作品が「万職図考」、同じく葛飾為斎の作品が「花鳥山水」「為斎画式」の2種、他は、「浮世画譜」が溪斎英泉・歌川広重画、「万象写真図絵(図譜が正しい)」が歌川貞秀画、「后素画譜」が鶴巢居士撰(画か)、「絵本(画本)錦の囊」が溪斎英泉画、「絵本龍の部」「絵本龍之都」の誤りであろう)が北尾重政画となる。そのうち、鶴巢居士は他に何の手掛かりもない謎の人であるが、画風は北斎系。したがって、すべて浮世絵師による作品ということになる。当時販売されていた画譜・絵手本類は数十種を下らないと推定され、他の流派の絵師によるものが1点も入っていないのは何故と思うのは私一人ではあるまい。幕府が市井の浮世絵師に命じて肉筆画の「浮世絵画帖」を制作させ出品したことを思えば、時代が大きく転換し始めていることを示すといえるかもしれない。

12種の刊行年を調べると、「北斎漫画」の初編が文化11年(1814)、「北斎画譜」は北斎没後の嘉永期(1848～54)に既刊の画譜を集めて再編集したもの。「浮世画譜」は天保・弘化期(1844～48)に英泉が初・2編、嘉永期に広重が3編を描いたと推定されるものであるが、刊記のあるものが確認されていない少し怪しげな作品。「万職図考」は文政10年(1827)から嘉永3年(1850)刊。「北斎画本」は未詳の作品。「絵本武蔵鑑」は天保7年(1836)刊の武者絵本。「万象写真図譜」は文久4年(1864)序刊であるが、数編あり、何時、何編が刊行されたのか、よく分からない本である。したがって、慶応2年に3冊は刊行されていたことが判明するのはそれなりの意味を持つと思われる。「花鳥山水図式(花鳥山水 細画図式)」は横本であるが、嘉永期に初編が出、順次、慶応2年の5編迄刊行されている。「為斎画式」は、

元治元年(1864)序刊。「后素画譜」は天保3年序の墨摺本が早く、弘化(1844～48)頃に彩色摺が出たと推定されるもの。出品されたのは彩色摺の方であろう。「画本錦の囊」は、文政11年(1828)序刊。「絵本龍之都」は刊年未詳。幕末期の刊行であろうが、北尾重政(1739～1820)は随分以前に亡くなっている。遺稿があったのであろうか。

次に価格。1冊当たり最も安いのが、「花鳥山水」の0.06両。これは墨摺りの小型本なので首肯できる。最も高いのが「北斎画本」「武蔵鑑」の0.125両、おおよそ0.1両前後である。幕末期は物価の高騰が著しく、1両が10000円前後のイメージというので、1冊当たり1000円くらいというところであろうか。

「雑品」のなかの錦絵は200枚で、内訳は「源氏絵」79、「江戸名所絵」30、「東海道絵」55、「富士各所絵」36。代金は計1.785両。1枚平均0.008925両なので90円くらいということになろうか。ずいぶん安い。錦絵は皆大判と考えてよいと思われるが、東海道絵が広重画の保永堂版「東海道五拾三次」、富士各所絵が北斎画の「富嶽三十六景」であったかどうかは判然としない。随行した商人は、それとは別に「錦絵」を5500枚運んでいる。これらは、万博の期間中または万博終了後に、寄贈あるいは売却されたものと思われる。

江戸幕府が何を基準に「画式の書」12種を選んだのかはよく分からない。推測すれば、華やかで分かりやすいものを選んだ、北斎を高く評価したということであろうか。ただし、北斎の武者絵本で、なぜ「武蔵鑑」だけを選んだのか、そして「北斎画本」は何?ということはないであろう。

明確な記録はないが、安政以降は海外との貿易が拡大し、日本の絵入版本や浮世絵版画が、従来より多く

輸出されたものと推定される。そのことが、欧米の日本理解と日本美術評価、とりわけ浮世絵版画の評価に繋がりが、ジャポニスム形成の基調を整えたことは間違いない。そして、慶応3年の万博がその一助となったことは確実である。

ともあれ、『徳川昭武滞欧記録』は、我々に種々の情報を提供してくれる。私がありがたかったのは、慶応3年に、『北斎漫画』は既に14編まで刊行されていたことが確実になったことである。故、永田生慈氏が推定していたとおりだったのである。

私は今年こそ、一回は万博に行こうと思っている。

季刊 美のたより No.231

令和7年 7月 11日

発行 大和文華館